The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	よそ者の想像 : ナショナリズムに抗する読みの実践
Author(s)	沈, 正明
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26233
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕

よそ者の想像
――ナショナリズムに抗する読みの実践――

学位申請者　　沈　正明

この論文では、文学、なかでもエリートの専有物ではなく一種の大衆文化としての小説を題材にし、それらの読みをつうじて、国民的な想像力を内破しようと試みた。

グローバリゼーションが唄われて久しいが、ネイションに基づく想像は今でも根強く残っている。「外国人」観光客、「外国人」犯罪者、「外国人」労働者などの日常的な言葉が表しているように、グローバルな世界はむしろ、国ー内に外ー国を無数に浮かび上がらせているのだ。日韓の関係もその例外ではなく、いわゆる文化交流が増えた今、いつになくナショナルな言説が目立つのは偶然ではないだろう。とすれば、固有の文化やネイションという実体が当然のものとして想定され、そのうえで交流や共存を語るといった、問題のとらえ方そのものを問わなければならないだろう。そして、ネイションの境界において規定される「われわれ」と「かれら」と言った区分を問い直すためには、人々の想像というものに注目しなければならない。言いかえれば、小説など印刷メディアをつうじて一つのネイションを想像するとされる個々の匿名の読者という次元に立ち戻ることが要求されるのだ。それらの読者たちをネイションとは異なる主体としてとらえるのは、書かれた内容をいかに読むかという読みの実践と深く結びついている。理論面においては、人間はみな平等な知性を持っているとし、書かれた言葉と現実の隔たりを強調するのではなく、平等を刻印している言葉のなかにそれが存在しているということ、そして現実とされるものに押し入りながらそれを主張することに政治を設定するジャック・ランシエールの議論を参考にする。

ネイションという共同体を構成するとされる個の問題を考えるため、まず星野智幸の『俺俺』と『ロンリー・ハーツ・キラー』を読んだ。二つの小説は、「われわれ」と同一化できない「外国人」の問題を明確に提起する。それらにおいて、自己同一的な「私」は外部に「外国人」を設定することにおいて成立するが、そのような他性とはもとより個が存在する条件である。そこから、留まらない共同性は、みなが「俺」ではなく統合されない「外国人」としてあるとき実現されるという結論を引き出すことができるだろう。

つぎに、そのような「私」たちの集合としての大衆の問題を考えるために、伊坂幸太郎の「魔王」と「呼吸」、『モダンタイムス』を読んだ。小説における大衆を考えるとき、二つの位相における表象が問われるだろう。まず、他の表現様式と同様、小説は個々人と一かたまりの人間の流れを描けるが、大衆そのものを現前させることはできないという点を上げることができる。また、大衆は、たとえば人民とならず者たち、それぞれの国民と難民といったように、縦に横に分割されたものとしてとらわれてきた。私たちを取り巻くシステムにいかに対抗するかを問うこれらの小説を手掛かりにし、ネイションにより分割されない大衆的主体は、現実の仕組みとされるものに異を唱える者たちのつながりにおいてまず設定することができるという結論が出される。

「俺」にならないものとしてのナショナル・マイノリティを考えるためには、伊井直行の『ポケットの中のレワニワ』と李良枝の『由熙』を読んだ。前者では、「日本人」というアイデンティティの名前がいかに専有されうるかについて考察することができる。言語における行為は今すぐ現実の差別をなくすことはできないが、現実的であるとされる物事の編成を問題にすることにより、やはり現実に介入することができる。「ナニジン」という言葉が骨抜きにされる実践もそこからはじまるだろう。まさにそれが、この論文が目的とするところでもある。ナショナル・アイデンティティの問題がより明確に現れている後者においては、小説における言語をめぐる葛藤が、実体としての韓国／日本、韓国語／日本語という両者択一的な関係性ではなく、それらの自己同一性に還元されることのない「余白」にかかわるものであるという読みを提示した。そこでもう一度、境界は存在するときにだけ超えられるということを確認することができるだろう。『由熙』をもっぱらナショナルなアイデンティティのあいだに存在する小説、あるいはそれを越えようとする小説として読むとき、読者はそのような軸にもとづいて境界を設定しつづけることになるのだ。

最後に、奥田英郎の『サウスバウンド』をつうじて、日本語小説の「外部」としての「韓国」の「読者」に接近する。長らくテクストの外部に留まっていた読者の創造的な（誤）読に注目し、ナショナルな想像の外部とされる「外

国」の読者の読みにそって「日本」の「外部」としての「南」を想像する小説を読むことにより、ネイションの境界にかかわって小説がいかなる想像を触発しうるかを見ることができる。結論的には、小説において一種のユートピアとして描かれる「南」は、国境の外にではなく、ネイションまたはシステムの内部に切り込む、システムから除外された者たちとつながり、つねに「外国人」としてある私たちの「集まり」において確保されると言うことができる。

以上のまとめからも分かるように、この論文は何よりも読者という位置にこだわって書かれている。しかし、このときの位置性は、あらかじめ与えられたものではなく、読むことにおいて獲得されるものであり、他の読者たちといつでもつながりうる可能性において設定されているということは言うまでもないだろう。「日本人」や「日本文化」、などといったナショナルな実体に絶えず回収される既存の読みに抗する以上の読みの実践において、そのような想像そのものを揺るがし、平等な個々の読者をつかの間結びつける共同性の端緒を見据えることができる。小説は、ナショナリズムに抗しうるのだ。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　沈　正明　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　川村　邦光 副 査　大阪大学　教授　杉原　達 副 査　同志社大学　教授　冨山　一郎

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨

学位申請論文題目　　よそ者の想像
―ナショナリズムに抗する読みの実践―

学位申請者　　沈　正明
論文審査委員
主査　文学研究科教授　　川村邦光
副査　文学研究科教授　　杉原　達
副査　同志社大学教授　　冨山一郎

論文内容の要旨

本論文では、ひとつの国民とその他という考え方、また国民国家の境界に沿ってイメージされる我々と彼らとの境界を設けて、よそ者・外国人を排除していくナショナリズムに対抗する思想の可能性を、現在の日本小説を読むことを通じて分析して考察することを目指している。異質な他者として、よそ者が想像され表象される思考法、またそれを批判的に解体して、ナショナリズムを越える思想を探る、社会思想史的研究であるといえる。

序章では、よそ者、一般には外国人と呼ばれる存在とは、どのように想像され表象されるのか、ひとつのナショナルなアイデンティティをもつ我々とそれとは異なった彼らの曖昧ながらも、明確に存在する境界をどのようにして揺るがすことができるのか、と問題設定をする。そのもとで、2000年代に日本ばかりでなく、韓国でも広範に読者を獲得した日本文学の「読みの実践」を提起する。本章の「読みの理論」では、依拠する先行研究の批判的な検討をして、理論的な枠組みが提示されている。ジャック・ランシエールなどを援用しながら、「文学を読む行為自体が持つ政治性を考えるため」、読むという行為を通じて、書かれたもののもつ可能性を生み出す「解釈行為は、その秩序を乱す政治になりうる」、また「解釈それ自体、真の政治なのだ」として、「よそ者の想像」「ネイションの想像をかき乱す読みを実現する」ために、文学作品の解釈が行なわれる。

第一章では、私もしくは「俺」に焦点を合わせて、星野智幸の『俺俺』『ロンリー・ハーツ・キラー』を解釈していく。ここでは、外部に他者・外国人を設定して排除することによって、自己同一的な「俺」たちの共同体的世界、さらにはネイションが生み出される一方で、外国人を他者として設定すること自体が個の存立する条件となり、特異性としての個が出現することを論じている。

第二章では、「個の集まりとしての大衆に関わる想像」を、伊坂幸太郎の「魔王」「呼吸」『モダンタイムス』から読み込んでいく。これらの小説では、日本を背景にして、アメリカ人に代表される外国人、また外国に対して一体化する日本人大衆の動きが描かれるなかで、ナショナルな想像によって形成される国民国家に対抗する政治的主体としての大衆が現れていることを、登場人物の行動から探っている。

第三章では、共同体内部の他者としてのマイノリティに関して、伊井直行の『ポケットの中のレワニワ』と李良枝の『由熙』を取り上げて考察する。日本人や難民というアイデンティティを再編し、言語的虚構がネイションの境界だけでなく、現実に介入しうることを確認できるとともに、マイノリティ性とは固有のアイデンティティとしてあるのではなく、アイデンティティを決める線引きに絶えず抵抗するものとしてあることを論じる。

第四章では、資本主義や国民国家体制の外部を志向する人物を描いている、奥田英朗の『サウスバウンド』を取り上げて、韓国の読者がどのようにこの小説を読んだかを検討し、地理的な国境ではなく、国家の外部を想像していく読者の読みを分析して、小説は読まれることによって、新しい共同性またはユートピアを想像していくことを論じる。

終章では、これまでの議論をまとめるとともに、大衆文化としての小説をいかに読むかという、読みの実践のもつ意義を論じている。読みの実践、あるいは読書という介入を通じて、人間の区別にもとづく差別に抗する主体を想像でき、その可能性を押し広げていくことができること、それが読者たちの繋がりを可能にする解釈共同体の構築へと向かう可能性があることを強調する。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本語文学のなかで、日本においてばかりでなく、韓国でも翻訳されて多くの読者を獲得した作品を取り上げて、たんなる恣意的な作品の選択・解釈によるのではなく、「物語の位相においてネイションの想像をかき乱す読みを実現する作品」を解釈して、読みの実践を通じて切り開くことのできる地平を提示しようとしているところに特色がある。以下、本論文の評価されるべきところを二点にわたって述べていこう。

第一に、本論文では、重要なテーマになっている、読みの実践という戦略的な概念にもとづいて、議論を第一章から第四章へと段階的に発展させて、設定した問題を追究し、議論を深化させて展開している点を評価できる。各章において、私、大衆、マイノリティ、共同体の外部といった論点を展開していくことによって、読むという行為が小説をたんなるフィクションとみなして消費して片付けてしまうのではなく、国民といったアイデンティティを解体して、差別や排除をもたらすナショナリズムに対抗する主体を、読者において創出させる契機となることを明らかにして、あらためて読者の位置づけをし、新たな読者論を提起していると言える。第二に、第四章では、スタンリー・フィッシュの解釈共同体の概念を用いて、韓国語に翻訳された日本小説『サウスバウンド』に対する、韓国人読者の読みの実践を分析して、興味深い論点を提示している。多くの読者は韓国の文化的・歴史的な背景からナショナル・アイデンティティにもとづいて読みながらも、この小説での「南」への移住という設定を重視していることを指摘し、そこに読者自身の価値観や世界像と関わらせて、国民国家の外部を読み取っていることを明らかにしている。

本論文では、外国人をよそ者として排除し差別していく、ナショナリズムに対抗する想像をいかにして育んでいくのかという視点から、現代日本の小説を読み込んで、すぐれた考察をしている。ただ分析の対象とした小説が、どのような基準のもとで選ばれたのかについての位置づけを明確にする必要があったと考える。また、先の解釈共同体の概念を用いた分析ではすぐれた論点が提示されているが、この解釈共同体をかなり一般化もしくは固定化しすぎ、読みの実践の相違に着目して、複数の重層的な解釈共同体を提示することによって、読みの実践に関連する議論を一層深めることができたと考える。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。